

觀猿王瀑布記

令和四年七月二日

(担当

金男

哲彦

左起子

俊彦)

原文

①安政庚申閏三月初五日、草庵緝、來觀猿王瀑布、高凡數十丈、噴沫怒發、左右激注、水勢所穿、中間自成一池、沿崖

②而上、立而視之、廣蓋丈餘、一人試抱石投之、則其深不知凡幾尺也、既而又奔流直下、以至地、地一面皆石、平坦如砥、而水鋪其上、

③清淺迸射、又凡數百步、以至谷口、仰而望之、則兩崖危嶮削絶、殆欲傾崩、而枯藤老松、垂枝遮蔽之、亦自然成趣、乃就樹蔭、安茶鼎、

④汲泉、而煎、煖酒而酌、徜徉盤桓、及暮而去、此日天氣晴、風微有聲、冠者四人、童子二人、僕一人擔具而從、

読み

①安政庚申閏三月初五日、草庵緝は、来て猿王瀑布を觀る。高さ凡そ数十丈、噴沫怒發、左右激注、水勢穿つ所は、中間に自から一池を成す、崖に沿いて上り

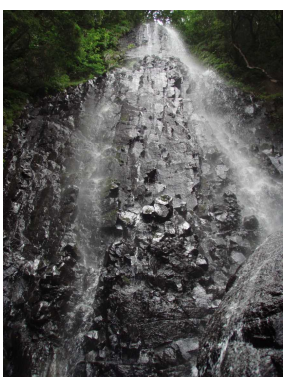
②、立ちて之を見る。廣蓋は丈餘り、一人試しに石を抱き、之を投げる、則ち其の深さは凡そ幾尺か知らざるなり。既にして又奔流直下、以て地に至り、地は一面皆石、平坦は砥の如く、而して水は其の上を鋪く、

③清淺迸射、又凡そ數百步、以て谷口に至る、仰ぎて之を望めば、則ち兩崖は危嶮削絶、殆ど傾崩欲とす、而枯藤老松、枝を垂れ之を遮蔽す、又自然と趣き成し、乃ち樹蔭に就いて、茶鼎を安じて

④、泉を汲みて煎じ、酒を暖め酌む、徜徉盤桓、暮に及んで去る。此日天氣は晴れ、風微かに聲あり、冠者四人、童子二人、僕一人具を擔いて従う

訳(写真は池田俊彦さんによる)

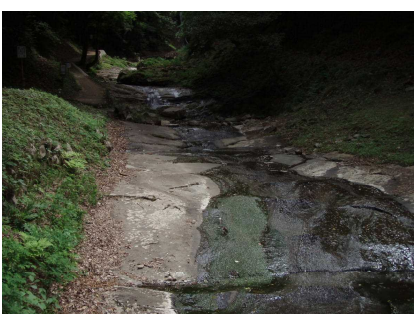
安政七年閏三月五日、私草庵緝はやって来て猿王瀑布を見る。高さはおよそ数十メートル、しぶきは激しく、左右に激しく注いでいる。



水の勢いが通る所は、間に一つの池を作っている。崖に沿って上り、立つて之を見る。広さは三メートルほど、一人試みて石もって、投げてみる。その深さは凡そどれだけかわからない。

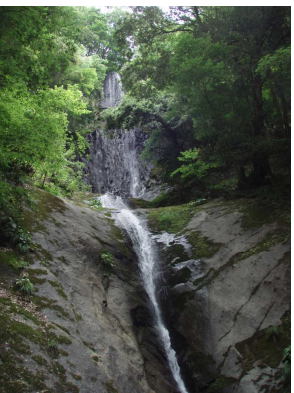


また、急流はまっすぐ下に流れており、直下は、地にとどき、その地は一面皆石だ。平坦なことは、磨いているように見える。水はその上をすべり、清らかな浅瀬は、反射している。



また凡そ数百歩進むと、谷の口に至る、仰いでこれを見ると、則ち両側の崖は危嶮で削れて無くなり、殆ど崩れてしまいうさだ。そして、枯れた藤や古い松は、枝を垂れこれを蔽い隠している。これもまた、自然の趣き成している。

樹木の蔭に座り、茶鼎ちやけいを置く、水を汲み、お茶を煎じる。酒を暖め酌くむ。その辺りをぐるぐると見て回り、日が暮れてきて、帰しもべる。この日は天気は晴れ、風は微かに音をたてて吹いていた。若者四人、子ども二人、僕一人道具をかついで来た。



言葉・注

万延元年（一八六〇）年閏三月

安政七年三月十八日に万延と改元

『山窓功課』より

四日 此日拉高浦豊太郎藤原柳谿大石四郎赴村岡歎（?）

観猿王瀑布。此夜宿村岡小谷氏

五日 此日観猿王瀑布。還宿小谷氏。六日七日宿小谷氏。八日宿山根氏。

丈Ⅱ一丈は十尺、三メートル余り

迸Ⅱホウ ホトバシル ※参考 迸出ホウシュツ ほとばしり出る。水などが勢

いよく湧き出ること。

危Ⅱ 安定せずくずれそうなさま。危険なさま

既而Ⅱスデニシテ

奔流Ⅱホンリユウ 勢いよく流れる、流れ

欲Ⅱくせんとす

遮Ⅱサエギル

蔽Ⅱカクス オオウ

鼎Ⅱカナエ ケイ

安Ⅱ 安んずる

煖Ⅱ 暖

徜徉Ⅱショウヨウ気ままに歩き回る 盤桓Ⅱうろうろ歩き回ること

※逍遙盤桓

（游今瀧山）

冠者Ⅱカンジャ成年に達して冠をつけた男子。「論語・先進」カンジャ・カジヤ

「日本」①官のない六位の者。②若者。③召使の若者。

僕Ⅱしもべ。召使や雑用をする人のこと

擔Ⅱ担う